

2022年5月15日

主を遣わされた方は眞実

ヨハネによる福音書 7：25～31

・「イエス様は救い主」との告白を巡って

だいぶ以前になりますが、教会と直接関わりがない方が突然教会を訪ねられて、こんなことを問われました。「キリスト教とは、一体どんな宗教なのですか。一言で言ってください。」と。「一言で」という言葉が、とても心に残りました。その問いを受けて、私自身とても考えさせられたのです。果たして、キリスト教を一言で表現するとすれば、そうなるのだろうか考えました。いろいろな牧師の言葉を思い浮かんだのですが、結局こうお答えしたのです。「イエス様を救い主と受け入れる宗教です」と言いました。どうしてそう答えようと思ったのか、振り返って見ますと、「キリスト教」のキリストとは、救い主を意味する言葉であるからと思ったからなのです。

今日の26節に、「メシア」と出てきますが、これは新約聖書が書かれている言葉に遡りますと、「キリスト」となっています。新約聖書は、当時の地中海世界の公用語であるギリシャ語で書かれていますが、勿論イエス様が生きられた時代のユダヤの普通の人が、ギリシャ語を話すわけではありませんので、日本語に訳される時にわざわざユダヤの言葉に置き換えられて「メシア」となっているのです。ですから、この「キリスト」とは、ユダヤの人たちが待ち続けた「メシア」、救い主を意味しているのです。つまり、キリスト教とは、イエス様を神様が約束された救い主であると受け入れた人たちが集められ、教会が形作られ、そして、地上に歩み出したものなのです。それは、言い換えれば、この人、つまり、ナザレの人イエスを救い主として受け入れるかどうか、全てがかかっている宗教であると言ってよいのです。

ですから、その人の問いに答えながら、私自身がとても問われた思いがしました。では、自分はイエス様を救い主と受け入れていることを自分はどのように理解しているかということでした。何か数学の公式を覚えているように「イエス様はキリスト、イエス様は救い主です」というようになっていないかと思わされてきたのです。つまり、私たちが「イエス様は救い主」と告白していることは、一体どういうことを意味しているのだろうかと言うことを考えなければならない、そういうことです。

今日の箇所にも、イエス様を救い主として受け入れるかどうか、その問いの前に立たされている当時のユダヤの人たちの姿が出てきます。彼らの姿を辿っていきますが、そして、そのことを通して、私たちが今「イエス様は救い主」、このことを受け入れさせていただいている恵みはどのようなものであるか。そのことを受け入れることで、教会の枝とされて歩んでいることの意味を、改めて受け止めていきたいと思います。

・人々の心にある問

繰り返しになりますが、7章19節以下は、神の民イスラエルにとって大きな祭りである「仮庵祭」の期間に起こったことです。エジプトを脱出したイスラエルの民は、結果として40年間荒れ野を旅することになりました。その荒れ野での旅において、イスラエルの民は、仮庵、つまり、仮に建てた小屋のようなものを作り滞在し、出発する時にはそれを壊して運んで移動する、そうして過ごしました。そうして歩んだ荒れ野の旅は、困難も多かったわけですが、しかし、神様に支えられて歩んだ期間でも時でもあったのです。それで、そうして神様に導いていただいた荒れ野の旅の姿を忘れないために、1年に一度仮庵を立ててそこで過ごし、エルサレム行って神様に特別の犠牲を捧げる。そのような特別な時、その祭りである「仮庵祭」が行われることになりました。ですから、神様に支えられる恵みを、特に深く思い巡らす、そういう期間を過ごしていたのです。その時に、イエス様をどのように受け止めるかで、大きな論争が起こっているのです。

その祭りの期間に、イエス様はエルサレムに行かれました。人に隠れるようにしてエルサレムへ行かれたことから、単純に神様を礼拝する、そのような思いで向かわれたのだと思います。ところが、そこでイエス様は神様について話をする事になりました。エルサレムへ向かわれた経過を思います時に、イエス様が進んで話をされたということではなく、人々の問いに答えていくうちに皆がイエス様の話を聞きたいと思った、そういうことだったからだと思います。そうして、皆の前で、神殿の境内で、イエス様が神様のことを話されることになったのです。

こういうイエス様の姿を見る時に、人々の間に戸惑いが起こってきました。多くの人たちは、「あのイエスは神様の御心を歪めている。許すことが出来ない存在だ」と思っています。しかし、一方で「こんなふうにみんなの前で話しているということは、ユダヤの議会において、イエス様のことを救い主として認められたということではないか」と思う人もいたということです。この議会とは、今で言えば裁判所や議会や行政機関を兼ねるものですから、それこそ当時最高の権威を持っていました。その議会が、イエス様を救い主と認めたのではないか、そういう意見が出されたのです。

では、この人たちは、イエス様を救い主として受け入れようとしていたのかと言うと、それほど単純ではないとも思われました。「議員たちは、この人がメシアだということを、本当に認めたのではないだろうか」と言うことですから、あくまで様子見と言うことだと思います。そして、本当に認められたら大変ではないかとも思っているのです。なぜならば、イエス様が、神様の約束された救い主ではないということが出来る根拠があると思っているのです。それは、イエス様の素性が十分に分かっていると知っていることでした。

イエス様は、当時辺境のガリラヤのナザレという町で育たれました。大工の家の子どもとして、実際に生活されたわけです。王様の家でも、偉い聖書の研究者の家でもありませんでした。本当に、普通の家にお育ちになったのです。そのようなものが救い主であるだろうか、そういうことです。神様から遣わされた救い主であるならば、もっと違った出生の仕方、育ち方をするはずではないか、そういうことなのです。

このような人々の思いを受け止める時に、このような問いは今もあるのではないかと思います。古今東西、救い主を自称する人はたくさんいます。その多くの方は、出生が謎めいていたり、幼少のころから他の子どもとは違う歩みをしていたり、そういうことが必ずあるものです。そして、そういう出生や幼少期の特異な姿が、その人が救い主であることを保証するものとされているのです。こういう姿で生まれたから、幼少期にこういう特異な姿で歩んだから、救い主であるというようにです。

しかし、イエス様は、そういう姿とは全く違った姿で歩まれたのです。本当に普通に赤ちゃんとしてお生まれになり、ナザレのヨセフの家で、普通に暮らされたのです。そこに、神話を形作っていくような、特別な姿はありませんでした。それは、彼らが受け止めているように、イエス様が救い主であることを否定する根拠なのでしょう。勿論、そうではないのです。そのことは、実は、そもそも彼らには大切なことが分かっていたということを示すことになるのです。

・神様に遣わされたイエス様

今、敢えて分かりやすく図式的に、イエス様の誕生は特別な姿ではないと言いました。クリスマスの夜に起こったことだけを見れば、確かにそうです。ユダヤの普通の人に、ひとりの男の子が生まれた、それだけです。しかし、その子の誕生は、ほかのどの子どもの誕生とも違う意味を持っていました。イエス様がそのことを理解するための鍵となることとお話になっています。それは「わたしが自分勝手に来たのではない。わたしをお遣わしになった方」と言われていることです。イエス様を、私たち人間の世界にお遣わしになった方がおられるのです。その方とは、言うまでもありませんが、神様です。つまり、イエス様は神様に遣わされて、私たち人間の世界に来られたということなのです。そのことを受け入れるかどうかの問題である、ということなのです。

イエス様は神様に遣わされて人間の世界に来られた、多くの方は、そのことを知ることができませんでした。しかし、例外的に知ることが出来た人がいました。それは、イエス様の両親であるマリヤとヨセフであり、羊飼いであり、東の国の博士たちでした。つまり、神様から伝えられた人たちでした。そうして、イエス様が神様から遣わされたことを知ることになったのです。

そして、イエス様はここで「大声で言われた」とあります。叫ばれています。この

時のイエス様の思いはどのようなものだったのでしょうか。人々に向かって、「お前たちはどうして駄目なんだ」と、強く叱責しているのでしょうか。人々を断罪するような、強い言葉なののでしょうか。私は、そうは思えなかったのです。この「大声で言われた」、声を荒げて言われたのは、やはり深い嘆きではないかと思います。「どうしてなのか」、そういう思いです。神様が特別に選ばれて、今ここで祝っているように、荒野の40年導かれるという特別な経験をしてきた、その神の民であるあなたたちがどうして、全く違う方向へと進んでしまっているのか、その深い嘆きなのです。そのような嘆きの思いが、「大声で言われた」ということに繋がっていることを思うのです。

そして、ここでのイエス様の嘆きの深さが、よく示されていると言葉があることを思います。ここでイエス様は「わたしをお遣わしになった方は真実であるが、あなたたちはその方を知らない」と言われています。この言葉、最初私はよく分かりませんでした。よくよく考えれば、とても不思議な言葉なのです。「わたしをお遣わしになった」とありますので、当然神様を指しています。その方、つまり、「あなたたちは神様を知らない」とイエス様は言われたのです。これは、一体どういうことなのでしょう。この時、イエス様と向き合い、イエス様の言葉を聞いている人たちは、ユダヤの人たちです。神様の民として選ばれていることを心に、神様と共に生きることを何より大切に歩みたいと思っている人たちでした。その人たちに向かって、「あなたたちはその方を知らない」と言われたのですから、なぜ自分たちに向かってそんなことを言うのかと、反発したのではないかと思います。しかし、ここに彼らが抱えている本当の問題があったのです。

・「神様を知らない」とは

1週開きましたが、前回の箇所にも似たような言葉がありました。「あなたたちはだれもその律法を守らない」と。神様の掟である律法を守ることを何より大切と歩いて歩んだ、その彼らに向かって、「だれもその律法を守らない」と言われたのです。それは、彼らにとって驚きだったと思います。今日の「神様を知らない」ということも、同じなのです。イエス様が言うておられることは、明確だと思います。神様のことを知っていれば、当然、イエス様が神様から遣わされたことが分かるということなのです。そして、このことを受け止めていくために重要なのは、イエス様が「神は真実である」と言われていることです。この「真実」という言葉は、「真理」とも訳せますが、単に人間が考える真実、真理ではありません。それは、神様の前での真理、真実なのです。ですから、敢えて言い直してみれば、神様が本当の意味で願われていることと行ってよいと思います。

では、神様が本当に願われていることとは、一体何でしょうか。イエス様の目の前にいる人たちは、神様の言葉を守ることを何より求めておられると思いました。それ

が、律法を懸命に守っていくという姿勢に繋がって言ったのです。確かに、神様は言葉を持って歩むべき道を指し示してくださっています。こう歩めと、律法を与えて、示してくださっています。しかし、そこにあるのは、ご自身の言葉を守るかどうか監視しよう、そして、最終的に合格不合格を決めてやろうという思いだったのでしょうか。勿論、そうではないのです。神様がそう考えていると思えば、それは人間の思い込みに過ぎないのです。人間の側が勝手に、神様はそう考えておられるはずだ、そう思っているということに過ぎないということなのです。しかし、それは神様が本当に求めておられることとは、完全にずれてしまっています。

イエス様が「あなたたちは知らない」と言っておられるのは、そういうことなのです。つまり、神様のことが分かっていると思っている。そして、神様こう思っているはず、そこで、結局自分たちがこうだと思いこんでいる神様の思いを追い求めていくことになってしまう。その結局として、全く違ったものを追い求めてしまっている。そういう姿、イエス様「神様を知らない」と言われたのです。

そうして受け止めてきますと、それは、彼らの問題ということでは済まないことに気が付かされるのです。私たちもまた、問われているような思いがするのです。私たちは、本当に神様の御心が分かっているのでしょうか。神様が何を求めておられるのか、分かっているのでしょうか。わたしたちもまた、自分が受け取っている神様の御心を追い求めてしまっているように思うのです。結果として、全く違った方向に進んでいないだろうか。私たちもまた、問われてくるように思うのです。

神様が願っておられることとは何でしょうか。それを知るために、私たちがどんなに考えたとしても知ることはできません。知ることができる道は、たった一つです。それは、神様から直接聞くしかないのです。それも、聖書の言葉を通して、神様から直接占め示していただく鹿なのです。今、金曜日の聖書研究祈祷会で、エレミヤ書を読んでいます。先週の金曜日に読んだ箇所、バビロンによって攻められ、全てが廃墟となっていくエルサレムに生きる人たちに向かって、預言者エレミヤを通して、神様は、必ず未来が備えられていることを告げられました。そして、神様は、こういう趣旨のこと語られました。「昼の後に夜が来ることが変わらないように、あなたを支える私の思いは決して変わることはない」と。そして、最後に「彼らを憐れむ」と言われました。神様の人間に対する思いは、「憐れみ」なのです。滅ぼして、それで終わりということでは決してないのです。そうして、神様の御心を示されていることを思わされました。

神様が私たち人間に対して持っておられる思いを考える時に、いつも心にある聖書の箇所があります。「ああ、エフライムよ／お前を見捨てることができようか。イスラエルよ／お前を引き渡すことができようか。アダムのようにお前を見捨て／ツェボイ

ムのようにすることができようか。わたしは激しく心を動かされ／憐れみに胸を焼かれる。わたしは、もはや怒りに燃えることなく／エフライムを再び滅ぼすことはしない。わたしは神であり、人間ではない。お前たちのうちにおいて聖なる者。怒りをもって臨みはしない。(ホセア書 11:8~9)」、神であるから怒りを持って臨まない。そして、「激しく心を動かされ」、神様は、私たちを高めから見下ろす用意はしておられるのではありません。私たち人間のことを思う時、激しく心を動かされる方なのです。そして、「憐れみに胸を焼かれる」、神様の心には憐れみの思いで熱くなっておられるのです。それこそが、私たちが信頼を寄せる神様の姿なのです。ですから、その神様が願っておられることとは、この憐れみの心を受け入れて欲しいということなのです。どんな時にも変わらずあなたを愛し支える、その恵みに是非生きて欲しいということなのです。

そして、その神様の私たち人間に対する深い愛が形になったのが、私たち人間の世界にイエス様をお送りになられたことに示されているのです。今日の箇所の最後に、ある人たちが、もしメシアが来たとしても、イエス様以上の「しるし」を行うことができるだろうか言っている言葉が出てきます。この「しるし」とは、勿論、直接には、神様の業としての奇跡を指しています。けれども、それだけではないことを思われます。このしるしとは、行為としての奇跡だけではなく、語られる言葉によって引き起こされていることも含まれると思います。つまり、神様の愛が語り示され、それを人間が受け入れることです。そうして、神様の愛を人が知って生きようになることこそ、しるしだと思います。イエス様を見る、イエス様の言葉を聞く、その時、私たちは、神様のことが本当に分かるのです。神様が、私たちをどんな時にも導こう、支えようと願っておられる。私たちへの愛は、どんなに深く、大きいものであるか、イエス様を通して知らされていくのです。ですから、本当に神様を知ること、神様の愛を知っていくことと、イエス様を救い主と受け入れることは一つのことなのです。

・イエス様を受け入れる

今日の説教の初めで、イエス様が人々の前で話されたことに触れました。恐らくは、自ら望んだというよりも、求められて語ったのだと思います。しかし、人々は、イエス様から聞く時、神様のことが本当によく分かったのです。それで、更に求められて語ったのだと思います。別の福音書の言葉に、イエス様の話を聞いた人たちは、本当に驚いたとあります。それは、聖書をよく研究していた、律法学者から聞くのと全く違っていたのです。それはどうしてのなのでしょう。律法学者たちは、字面としての律法、私たちが言う旧約聖書をよく知っていたのです。しかし、彼らは、最も大切なことが分かっていなかったのです。この言葉を、語り掛けている神様の、人間に対する思いなのです。それは、「愛」であり、ホセア書の言葉で言えば「憐れみに胸を焼か

れる」ことです。律法学者たちは、神様は監視者であり、判定者と思っていました。その時、全く神様の御心が分からなくなってしまったのです。

それは、私たちの姿とも重なっているように思います。様々な現実の中で、私たちは時に「神様に見捨てられたのではないか」と思う時もあります。そして、自分の欠けに直面させられる時に「こんな私など、神様に受け入れられるはずがない」と思うことがあると思います。しかし、それは、あくまで私たちが考える神様の姿なのです。それは、神様の本当の御心とはずれてしまっているのです。ですから、私たちは求められているのです。私たちが受け取っていると思う神様の御心ではなく、真の神様の御心を知っていくことです。「憐れみに胸を焼かれる」、「あなたを見放すことも見捨てられることもない」、そうお語りくださることで示される神様の御心を受け入れていくことです。そして、その神様の御心は、イエス様に全て示されているのです。

今日の説教は、「キリスト教とはどういう宗教か」という問いから始めました。私は、「イエス様を救い主として受け入れる宗教である」と答えたと言いましたが、今、それだけでは十分ではないと思わされています。「イエス様を救い主としてお送りに下さった、神様の愛を受け入れる宗教です」とまで言わなければならなかったと、強く思わされています。私たちは、イエス様を救い主と受け入れ、イエス様によって示される神様の愛を受け入れて、信仰の道を与えられたのです。ですから、これからもこの信仰の道を歩み続けていきたいと願います。神様の愛の中に生きていきたいと思えます。そのことを、神様が何より喜んでくださるからなのです。